Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-06-05

巻頭言 ： コロナ禍のこの１年

矢野, 吉治

(Citation)
海事博物館研究年報,48:0

(Issue Date)
2021-03-31

(Resource Type)
other

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012866

巻頭言

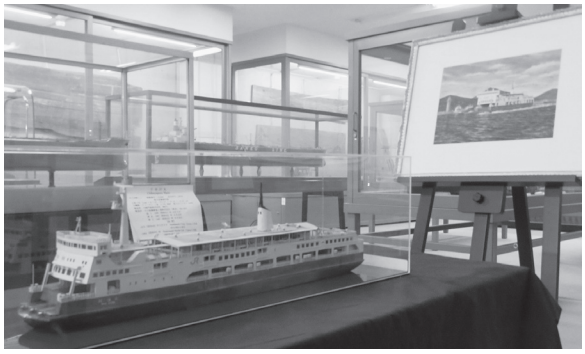
コロナ禍のこの１年

海事博物館　館長　矢　野　吉　治

令和元（2019）年12月に新型コロナウイルス感染症（国際正式名称COVID-19）が発現し、瞬く間に世界各地へと広がるパンデミックの様相を呈した。日本では令和２（2020）年４月７日に東京、神奈川、埼玉、千葉、大阪、兵庫、福岡の７都府県に緊急事態宣言が発出され、同月16日には対象が全都道府県拡大された。この宣言は５月25日をもっておよそ１か月半ぶりに全国で解除されるに至った。さらに、年が明けた令和３年１月８日には首都圏の東京、埼玉、千葉、神奈川に、その後、栃木、岐阜、愛知、京都、大阪、兵庫及び福岡の１都２府８県に再び同宣言が出され、生活の維持に必要な場合を除き、外出の自粛をはじめ感染の防止に向け、国を挙げて取り組むことになった。このようにコロナ禍が長期化する中、当館では令和２年２月29日から３月15日までの間、本学の活動制限指針に従って急遽、臨時休館とし、さらに４月５日、同月19日まで休館を再延長した。その後、感染拡大防止のため学生のキャンパスへの入構が許可されない実情や高齢の特別専門員（ボランティアスタッフ）の感染への脅威等を考慮して無期限の臨時休館に至った。企画展2019「和船の活躍した時代」の会期を残したまま臨時休館が続いたが、令和２（2020）年は戦後75年という年であり、企画展2020の題材候補として取り上げるべく準備を進めているところでもあったことから、通常の博物館活動がままならない状況の中、中断している企画展と戦後75年に関連した新たな企画展示の同時開催が発案され、近隣の博物館等の開館情報や感染状況を見ながら打ち合わせ会合を再開して着々と準備を進めた。令和２（2020）年11月20日（金）には、大学側の了解を取付けて、会期を令和２年11月20日（金）から令和３年５月28日（金）として小企画展『戦後75年 太平洋戦争と船員』及び『和船の活躍した時代』を開幕した。ただし、臨時の開館日を毎週金曜日のみとし、検温や手指の消毒、また、必要時はハンズフリー拡声器を使用するなど、感染予防のために一定の制約を設けて、事前予約制による少人数の受け入れを始めた。

この１年、世界を蹂躙する未曾有の災禍の中、大学博物館として場面ごとに苦渋の選択を迫られたが、当館の専門員と特別専門員の熱意に加えて大学側の理解により、僅かずつではあるが本来の博物館らしさを取り戻しつつある。また、海事資料の寄贈や協力依頼等も徐々にではあるが復活しつつあり、喜ばしいことである。今年度からの新たな試みとして、人文学研究科及び理学研究科の学生への館務実習の場を提供し、大学博物館として新たな有効活用の第一歩を踏み出したところである。

これまで当館の活動にご理解とご支援、ご尽力を賜りました皆様、ご来館いただきました皆様に衷心より感謝し御礼申し上げます。



宇高連絡船「阿波丸」模型と高松に入港する阿波丸絵画
令和２年11月４日寄贈